

福井大学教職大学院における新人教員の学びのプロセス：半年間の記録に基づく省察から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 半原, 芳子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8404

福井大学教職大学院における新人教員の学びのプロセス

半年間の記録に基づく省察から

半原 芳子

本報告は、筆者である「私」が福井大学教職大学院での教員としての経験を通じ学んだことおよびその学びのプロセスを記述したものである。私は2013年10月に本学教職大学院に特命助教として着任した。それまで日本語教師として外国人児童生徒および成人への第二言語教育に携わってきた私は、本学教職大学院への着任を機に学校教育・教師養成という新たな領域に足を踏み出すこととなった。現在、日々自分のこれまでの常識やアイデアが覆されたり塗り替えられたりする経験をしている。その中で困難や葛藤を感じることもある。しかし、この報告を書いている今自分の中に確かな学びの手応えを感じている。本報告ではその学びに自分の言葉で輪郭を与えてみたい。

本報告は福井大学教職大学院に着任して以降ほぼ毎週つけている記録に基づき自身の学びを辿っていくものである。記録には一週間をふり返って印象に残った出来事やその時の自分の気持ちや考え、疑問、悩み、気づき、これから試みてみたいことを自由に書いている。私が記録を書いている理由はいくつかあるが、一つは記録を書かなければ日々の自分の経験が言葉にされなまま流れていってしまうことへの危惧からである。もう一つは本学教職大学院の院生が取り組んでいることを自分も追体験してみたいという思いからである。なお、本報告では本学教職大学院が定期的に発行しているニュースレターに寄せた自分のレポートも参照する。ニュースレターへの報告は自分にとってしばしば記録と同じ役割を持つものである。ここではその記録とニュースレターへの報告を基に、自分の経験を「当時」思っていたことと「今」思うことをできるだけ書き分けながら記述していきたい。

本報告の構成は以下の通りである。

1. これまでの歩み（着任前）
2. 多領域の専門家との協働という新たな環境への期待（着任1か月目）
3. これまでの自分と今の自分との統合（着任2か月目～3か月目）
4. 福井大学教職大学院での教育実践との積極的な向き合い（着任3か月目～4か月目）
5. 組織の一員であることへの意識と行動の萌芽（着任5ヶ月目～6ヶ月目）
6. 今後の展望

なお、本報告では福井大学教職大学院のスタッフと院生の氏名は実名であるが、そうではない方の氏名および機関等はアルファベット表記とした。

1. これまでの歩み（着任前）

私はこれまで日本語を第二言語として学ぶ外国人児童生徒および成人に日本語を教える実践を行ってきた。ただ、私の中では「日本語を教える」というと実際との齟齬があるように思う。日本語教師という職業がまだあまり認知されていないこともありつい自分の実践を「日本語を教える」と単純化し説明してしまうのであるが、実際は学び手が既に持っている力、すなわち母語・母文化を保全し、そこに第二言語を統合していくこと、さらには「言語を学ぶ」のではなく「言語で学ぶ」実践を心がけている。そして私自身の役割としては何かを教え与える教授者ではなく彼らと対話を通じ共に学ぶ「同行者」であることを大事にしている。これまで私が関わってきた人達は、成人は主に日本語を

主専攻・副専攻・選択科目として学習する大学生や大学院生、日本に住む外国人住民、技術研修生、ビジネスパーソン、外国人研究者、経済連携協定（EPA）で来日したインドネシア・フィリピン出身の介護福祉士・看護師候補者達である。児童生徒は、日本の公立中学校に通う外国人児童生徒である。

私が言葉の教師を志した理由は、子どもの時から人前で話すのが苦手だったことにある。人前で流暢に話せない自分にとって言葉を発するという行為は自分の全力を使い懸命に行なわなければならないものだった。そのため一つ一つの言葉が自分にとっては非常に大切で「自分そのもの」と言っても過言ではなかった。自分にとって全力で取り組んでいる行為を職業にすることは私にとって自然なことだった。言葉に関わる職業はいくつかあるが、その中から日本語教師を志したのはこの職業の新規性にあった。日本語教師は1990年の入国管理法の改定により外国籍住民が急増したことを背景に登場した新しい職業である。1990年代後半大学卒業を間近に控え進路選択に迷っていた私は生まれたばかりのこの職業に興味を持った。

日本語教師は社会と密接に関わる職業であると感じている。それは私自身の日本語教師一年目のある出来事をきっかけにずっと思っていることである。当時私は中東の小国ヨルダンにあるヨルダン国立大学で日本語を教えていた。ヨルダン大学は全国から優秀な学生が集まる総合大学である。ヨルダンは国民の多くがパレスチナから逃れてきた人々である。そのため、多くの人が母国はヨルダンではなくパレスチナだと考えている。そうした状況から国民の多くはヨルダンの土地を離れることに躊躇いはなくチャンスがあれば海外で仕事や勉強をしたいと思っておりそれは特に若者に顕著である。そのため外国語は彼らにとって国外に出るための格好の道具となる。当時ヨルダン大学ではヨーロッパで働きたい学生が多く、ドイツ語やフランス語、イタリア語などが注目を集めていた。日本語は、日本が地理的にも遠いこと、また日本語が彼らの母語であるアラビア語と言語的特徴が大きく異なることからヨーロッパの言語ほどの人気はなかった。それでもクラスには日本の進んだ技術や医療を学びたいと工学部や歯学部の熱心で優秀な学生が集まっていた。私は将来日本に留学し日本で働くことを志す彼らの夢の実現に少しでも役に立ちたいと思い、言葉や文型知識を熱心に教えていた。やりがいと充実感に満ちた日々。しかし、そのこと、つまり私の「日本語を教える」とい

う行為はヨルダンの優秀な若者を国外に送り出し国を空洞化させることにつながるものだった。それは日本への留学が決まったある学生の母親に指摘され気づいたことだった。私が行なった教育とは何だったのか。罪悪感を伴う重い宿題を背負い帰国した。以来、私は言葉を学ぶのではなく言葉で学ぶこと、そして言葉の教室を社会と切り離さないことを自分の信念にしている。

しかし、日本語教育の現場は社会や学習者一人一人の生活文脈と切り離された学習が行われることが多い。学習内容は項目化され細分化されている。例えば、今日の学習項目は「て形」（来て、見て、歩いてなど活用すると「て」が出現するもの）と言ったように項目化・細分化された言語知識から学習が組み立てられていく。もちろんこうした教育ばかりではないが、日本語教師の仕事をする中で私は日本語教育の実践を日本語教育の中だけに留まり考えることに限界と窮屈さを感じ始めていた。そして、日本語教育ではなく広く言語教育のあり方を模索したいと思い始めていた。以上が福井大学教職大学院に着任する前の私のあらましである。

2. 多領域の専門家との協働という新たな環境への期待（着任1か月目）

福井大学教職大学院に着任して1か月はこれから始まる多様な領域の専門家達との協働への期待に胸を膨らませていた。先に述べたように私は日本語教育の中だけで日本語教育を考えることに限界を感じていた。本学教職大学院には社会教育学、教育方法学、教育臨床心理学、教育実践史、教育行政マネジメント、コミュニティとしての学校と教師の力量形成、カリキュラム・授業改革、幼児教育、教育学、特別支援教育、算数・数学教育、環境教育、多文化共生教育・・・と実に多様な専門家がおりみんなが協働で教育実践に取り組んでいる。着任当初は目で見るもの耳で聞くもの全てが新しく興味の対象であった。当時の記録を読み返しこの時期がどういう時期だったかを今から考えると、それは、(1) 自分の狭いアイデンティティを固持する、(2) 「組織」というものを意識するようになる、(3) 新たな経験に言葉で形を与えることを渴望する、という三つの特徴的なことを行なっていた時期だったと思う。以下、一つ一つを当時の記録を基にその時の出来事や気持ちを書き起こしていく。

(1)自分の狭いアイデンティティを固持する

ここでは特徴的な二つの出来事を取り上げる。それらの出来事には当時の自分の気持ちに即し、【「日本語教師」として自分を紹介できることの嬉しさ】、【自分のこれまでを丸ごと肯定する】と名前を付けた。

まず、一つ目の【「日本語教師」として自分を紹介できることの嬉しさ】である。本学教職大学院では毎週火曜日に専攻会議とFD（ファカルティディベロップメント：本学教職大学院スタッフによる協働学習）を行っている。そのためその日は教職大学院のスタッフ全員が集まることになる。私は着任した日が火曜日だったため当日の専攻会議とFDで自己紹介を行なった。記録にはその時の気持ちを以下のように綴っている。

私の専門は日本語教育ですという自己紹介はとても嬉しいものだった。日本語教育の中身は今とても細分化されていて、やれ文法だ、やれ発音だ、やれ教授法だと専門が分かれている。でもそもそも言葉の教育は細かく分けられるものではないとの信念から「日本語教育」の専門家として多分野の方達と一緒に働きたいと思っていた。そうした想いがこれから実現される期待を持った。

(10月4日の記録より)

ここでは、日本語教育の中の細分化された領域の専門家ではなく日本語教育の専門家として多領域の専門家達と協働できる期待が書かれている。日本語教育では教師の専門が「文法」「音声」「教授法」と細分化されることが多い。私は、言語は細分化されるものではなく総体として捉えるものであるとの信念から、自分の専門を「教授法です」などと言うことに長年強い違和感を抱いていた。それが教職大学院では「私の専門は日本語教育です」と言うことができる。そのことが当時の私にとっては非常に嬉しいものであった。

次に、二つ目の【自分のこれまでを丸ごと肯定する】である。私は、着任後教育地域科学部の実践コア科目の一つである「教育実践研究A」（学部1～3年生が受講）および教職課程の必修科目である「教育実践演習」（学部4年生が受講）に関わる機会をいただいた。この二つの科目は同時間・同教室で実施することを基調とし、これにより教員養成課程に所属する全コース（教科）・全学年の協働探求が実現される仕組みとなっている。私は初めて参加したその授業で、臨床教育科学コース3年の男子学生Kくんの教育実習の経験と、理数教育コース2年の男子学生Iくんの介護体験の話

く機会を得た。その時の感想を書いたものが以下の記録である。

金曜日は学部の授業に参加した。臨床3年のKくんと、理数2年のIくんのグループに入った。これが時間を忘れるほど興味深かった。＜中略＞Kくんは教育実習（附属小▲年▲組、21日間）を通して自分の態度や言葉づかいに意識が向くようになったのだそうだ。自分が大学生のとき教育実習をした経験と照らし合わせながらとても興味深く聴くことができた。Iくんは介護体験で、Iくんの話は自分が関わってきた介護福祉士候補者への日本語教育の経験を支えに聞くことができた。二人の話 を聴いた後思ったことだが、これまで自分がいろいろやってきたことが二人の話を聴くときの大きな支えとなっていて今までの自分を肯定することができた。

(10月11日の記録より)

半年経った今でも私はこの時の自分の気持ちをありありと思いだすことができる。大学生の時国語の教員になることを考えていたこともあり私は教職課程を履修し教育実習を経験した。卒業後は、国語の教員の道は選ばず日本語教師になるのだが、日本語教師になってからは、前述の通り学生、技術研修生、ビジネスパーソン、研究者、介護福祉士候補者といった様々な背景や学習目的を持った外国人学習者と接してきた。このような数々の経験がこの時KくんとIくんの話の聴く時の大きな支えとなった。Kくんの教育実習の話は、自分の教育実習の経験と重ねながら興味深く聴くことができた。そしてKくんの経験を聴くことで私の教育実習の経験が相対化されていく不思議な感覚を味わった。また、Iくんの特別養護老人ホームでの介護体験の話は、外国人介護福祉士候補者の日本語教育に携わってきた自分にとって非常に身近なものであった。Iくんは利用者の立場から介護を捉えており、これまで介護福祉士の視点から介護の現場を見てきた私に大きな示唆を与えてくれた。二人の話を聴き終わった後、自分で自分のこれまでを丸ごと肯定できるような、そんな安心感に包まれた。

以上、着任1か月目の印象的な出来事を二つ述べた。その時はそれらの出来事をとても心地よいものと捉えていた。しかし、数カ月を経て思うのはこの時の自分は日本語教師というアイデンティティを固持しようとしていたということである。二つの出来事はまさにその象徴であるように思う。当時私は「日本語教師」とい

うとても狭いアイデンティティの中にいた。

(2)「組織」というものを意識するようになる

福井大学教職大学院に赴任して以降私は「組織」というものを強く意識するようになった。その証左として私の記録には「組織」という言葉が何度も出てくる。私は組織というものはその中にいるだけでは意識されないものだと思っている。つまり私には組織のことが意識にのぼるだけのきっかけが与えられていたのだと考えている。ここではそのきっかけだったと思う事柄を三つ取り上げる。

一つ目は着任した日のオリエンテーションである。オリエンテーションでは本学教職大学院の理念と目的について詳しく話を聴く機会を得た。以下、そのオリエンテーションの印象を書いた記録である。

着任初日のオリエンテーションで木村さんが教職大学院の理念と目的についての詳細な資料をくださり説明をしてくださるなかで森先生と松田先生が「やりながらでいいから」と声をかけてくださった。今思えばこの時間は自分がこれから取り組む教育実践をメタ的に捉えるための一歩であったのだと思う。＜中略＞この組織はとても複雑にそして綿密にそしてラフ(?)にデザインされている。

(10月4日の記録より)

自分のこれまでの職業人生を思い返してみても、自分がこれから携わる仕事の内容については説明があっても、組織自体についてこれほどまでに詳しい説明を受けたことはなかったと思う。それは何故かと考えてみるとおそらく「入ったばかりの人(自分)に今説明しても(説明されても)分からないだろう」という考えが話す側にも聞く側にも働いているからかもしれない。しかし、本学教職大学院ではスタッフが自分達の組織を知り、その組織つまり自分が今いるところに能動的であることをとても大事にしているように思う。そのことは赴任した初日右も左も分からない私に時間をかけて組織全体について説明してくれたオリエンテーションが示していると言える。

二つ目のきっかけは週間カンファレンスである。本学教職大学院では毎週木曜日に週間カンファレンスが行われている。毎週木曜日に行われることから通称「木曜カンファレンス」「木カン」と呼ばれている。そこでは、教職専門性開発コース(通称、ストレートマスター)の院生が日々のインターンシップでの実践を、日々

の記録を基に仲間やスタッフと共に意味づけ次の課題を捉えていくことが継続的に行なわれている。私は初めて参加した週間カンファレンスで中村諒くんと一緒にグループになった。中村くんは当時 M2 の院生で至民中学校にてインターンシップをしていた。その中村くんから「組織」という言葉が出てきて非常に驚いた記憶がある。そのことを書いたのが以下の記録である。

M2の中村くんが自分の置かれている今の現状(具体)を組織という点から観察していることにとっても驚いた。こうした高い思考力・認識力はどこから生まれているのか、教職大学院のどんな仕組みがそれを支えているのかに興味を持った。

(10月11日の記録より)

中村くんの話を聴き、自分は学生の時に組織や組織づくりといった観点を幾らかでも持っていたらと思う。本学教職大学院の院生が組織づくりという観点を持っていることに驚くとともに、その院生の力を支える本学教職大学院という組織にこの時益々興味を抱いた。

三つ目のきっかけは月間カンファレンスである。本学教職大学院では月に1回教職専門性開発コースの院生とスクールリーダー養成コースの院生の合同によるカンファレンスが行なわれている。合同で行なわれることから通称「合同カンファレンス」「合カン」と呼ばれている。初めて参加した合同カンファレンスでは、当時スクールリーダーコース M2 の木下純子先生(啓新高校勤務)と、スクールリーダーコース M1 の源甲斐恵美先生(特別支援教育センター勤務)と同じグループになった。この時印象に残ったことはお二人の先生方ともに学校という組織を「如何に学ぶ組織としていくか」という観点から日々の実践を行ない、それを語っておられたことである。その時の驚きの気持ちを綴ったのが以下の記録である。

それにしても、合同カンファレンスで木下先生も源甲斐先生も視点として持っていらっしやった組織を作るという視点。これはみんなの話を聴くと集中講座で読む『コミュニティ・オブ・プラクティス』¹⁾という本が少なからず影響を与えているようだ。教職大学院でこの本を読む目的は、上に立つ一部の人間だけではなく組織の構成員全員が自分達の組織をどのように作り運営していくかを考えることを組織づくりの基本姿勢に置くからなんだろうと思う。このことって、今まであまり意識したこ

とがないけどすごく大事なことなんだろうと思う。

(10月19日の記録より)

校長ではなく一教員である二人の先生方が、学校全体が学ぶ組織となるためにはどうしていけばいいのか、そのために自分達がどのような働きかけを行なえばいいのかという学校改革の視点に基づいた取り組みをなさっていることを聴き、学生・社会人の頃如何を問わず私はこれまで数々の組織に属しながらその組織をどうこうしていこうと思ったことはほとんどないことに気づいた。この時人間一人一人の持つ力とその尊さを思うと同時に、その一人一人の良い力が発揮され引き出され合う組織とは一体どういうものだろうとぼんやり考えた。

(3)新たな経験に言葉で形を与えることを渴望する

福井大学教職大学院に着任し、私は自分には言葉が足りないと痛切に感じている。日々新しいことを経験し新たな概念(例えば先の例で言えば「組織」など)に触れる中で、その新しい経験と概念に自分の言葉が追いついていかないもどかしさを感じている。そのもどかしさは以下の記録からも読み取れる。

それにしてもこの記録を書きながら自分の言葉がまったく足りていないことを情けないぐらいに感じている。自分が思ったことや考えたことがまったく表現できていない。久しぶりに感じることは壁。何か読みたいし何か書きたい。

(10月4日の記録より)

新しい経験に言葉で形を与えるために記録を書くのだがそこにはありふれた言葉や使い慣れた表現が並ぶ。当時、自分の経験が言い表せていないもどかしさと自分の言葉が非常に単純で少ないことに一種の焦りのようなものを感じていた。久しぶりに味わう言葉の壁。私はこの時から少しずつ本学教職大学院が発行している様々な資料を「眺める」のではなく「読む」ようになっていった。

3. これまでの自分と今の自分との統合(着任2か月目～3か月目)

着任2か月目から3か月目は、自分のこれまでの実践と福井大学教職大学院での実践の異なりに当惑しながらも向き合いそれらを統合しようと試みた時期であったと思う。当時の記録を読み返しこの時期のことを考

えると、それは、(1)アイデンティティが揺らぐ、(2)これまでの自分と今の自分を統合しようとする、(3)自分の実践に多くの人・モノ・コトが関わっていることに気づく、(4)新たなアイデンティティを受け入れ始める、というプロセスを持った時期だったと思う。以下、一つ一つを当時の記録を基にその時の出来事や気持ちを書いていく。

(1)アイデンティティが揺らぐ

私は当時研究室が同室で同僚の山口真希さんに分からないことがあると何でも聞いていた。山口さんは私にとって最も身近な同僚の一人であった。この時期私は本学教職大学院の刊行物を片っ端から読み始めていた。その中の一つに教職大学院のスタッフの実践研究論文集である『教師教育研究』があった。その中で私は山口さんが教職大学院で働き始めた当初、私とは少し異なる形ではあるが動揺や葛藤を抱えていたことを知った。ある日山口さんに、山口さんの論文に対する感想を伝え自分のアイデンティティが揺らいでいると伝えたところ山口さんがよく分かったと共感してくれた。以下、その時のことを記述した記録である。

『教師教育研究』6号の山口さんの実践研究論文²⁾を読み山口さんも教職大学院で働き始めた当初私と同じ葛藤を抱えていたことを知った。山口さんに「アイデンティティが揺らいでいる」という気持ちを伝えたらよく分かったと共感してくれた。山口さんの経験を聴いたり自分の気持ちを話したりしながら気づいたことは、私はこの教職大学院での仕事に慣れようとするあまり日本語教師であることをいったん外に置いて、学校教員という集団(今思うとそんなものはないのにと思う)に同化しようとしていたのではないかと思った。自分らしくいいという山口さんの言葉にホッとした。今までの自分の歩みをふり返ると、私は学校教育以外での学びを追求してきたように思う。学校教育でできないことを地域の日本語教室や放課後の教室で行なってきた。それはなぜかと考えると、私の中にいろいろな学びの場があっという思いがあるからなのだと思う。あるいは学校でできないのならそれを地域が担えばいいという思いからなのだと思う。学校教育でできないことを追求してきた自分が、学校教育にできることを追求しはじめ

ている。その方法として自分は前者である自分を消して後者である自分だけになろうとしていた、そこにこの葛藤があるのだと思う。自分の中に二つの基準を作ってしまうのかもしれないけど、まずは両方の自分を大事にしていこうと思う。

（11月29日の記録より）

私は山口さんに自分のことを話しながら自分が持っている違和感や葛藤の正体が少しずつ分かっていった。その違和感とはこれまでの自分と今の自分のズレから来るものであった。私がこれまで実践の場としていたのは学校ではない場、例えば成人の日本語学習について言えば日本語学校ではなく地域で行なわれる日本語教室に、外国人児童生徒の日本語学習について言えば放課後の学習支援の場に関わってきた。それは関わってきたと言うよりも自ら選んできたと言う方が適切だろう。そこには学校でできない学習をするという自負があったように思う。その自分が今学校教育に関わっている。そうしたズレあるいは真逆性が自分の中に違和感を生み、さらにその違和感は本学教職大学院に適応しようとするあまり「学校教育以外の場に関わっていた私」を消し去ろうとする自分の意識や行為によって更に強められていったのだと思う（今だから分かるが本学教職大学院ではそんなことは少しも求められていない）。この時期ちょうどニュースレターで書評を担当することになり山口さんの勧めもあって私は自分の専門分野の本を紹介することにした。書評でこれまでの自分を表すことができ、自分の中にあった歪みが少し修正され楽になった気がした。

(2)これまでの自分と今の自分を統合しようとする

これまでの自分を「ない」ものとするのではなく「ある」ものとする、そしてそれをニュースレターの書評で表すことで幾分気持ちが楽にはなったが、「学校教育以外の場に関わっていた私」と「学校教育に関わっている私」という二つの自分は依然存在した。そんな折私は2014年11月30日から12月1日に行われた実践研究東京ラウンドテーブル（通称、東京ラウンドテーブル）に参加することになった。1日目は二つのzoneから成るセッションが設けられており、私はzone Aの教職大学院改革に関するセッションに参加した。そこではこれから教職大学院を設置する宇都宮大学と大阪教育大学、そしてすでに教職大学院を設置し本格始動している福井大学がそれぞれの構想および取り組

みを紹介した。福井大学教職大学院からは当時専攻長であった松木健一先生が本学教職大学院の特徴と取り組みを話された。松木先生の話は私にとって本学教職大学院の仕組みを理解するためのものになったのはもちろんであるが、松木先生達はその仕組みを構想していく上で「二つの相反する対立構造を乗り越えていくこと」を志向していたことを伺い、自分の中の相反する二つの自己を乗り越えていくヒントを得た思いがした。以下、そのことを記述した記録の一部である。

東京ラウンドテーブルでの松木先生の福井大学教職大学院についての話は『教師教育研究』6号の松木先生の論考³⁾を読んでいたこともありずいぶん理解できた。印象的だったのが、教員養成を「大学基盤型」と「学校教育型」の二項対立の構造から、それを乗り越える両者統合的なあり方を構想しているところだった。〈中略〉先週の自分のふり返りでの到着点である、過去の自分（＝学校教育でできない学びを追求してきた自分）と現在の自分（＝学校教育でできることを追求しようとしている自分）の二つを思い出した。この二つを統合した新たな自分の専門を創造することで今自分が葛藤しているアイデンティティの揺らぎを乗り越え、新たなアイデンティティをつくることのできるのだらうと思う。

（12月2日の記録より）

松木先生の話をお聴いて私は随分気持ちが楽になった。今の自分の不安定な心の状態は新たなアイデンティティが形作られているその途中にあるものであり、焦らず今の状態の自分と付き合っていけばいいのだと思えた。

興味深いことに、当時私は以前の日本語教師アイデンティティに戻ることに抵抗感を持つようになっていた。以下の記録は12月上旬のFDでの出来事を書いたものである。そのFDでは『教師教育研究』7号（本号）に寄稿する自らの教師教育研究に関わる論文を構想する時間が設けられていた。私はこれまでの記録を読み返して気づいたことを発表資料としてまとめ（この発表資料については後述する）、その日同じグループだった松木健一先生、松井富美恵先生、杉山晋平さんに聞いてもらった。以下、その時のことを書いた記録である。

FDの時間に自身の教師教育研究に関わる論文についての構想を、松木先生、松井先生、杉山さんのグ

ループの中で発表した。自分のこれまでの記録を読み返して気づいたこと、現時点で辿り着いていることをまとめてみた。松木先生が、学び方には「分かる(=分析する)」「学ぶ(=真似る)」そして「物語る」があるとおっしゃっていた。そして、人は必然で起きたことと偶然で起きたことをつなぎながら、その二つのこと(事象)を統合して自己(アイデンティティ)をつくっていくのではないかと。つまり今私はこれまでの自分(=必然と偶然で起きたことをつなぎながらここまで来た自分)と教職大学院での出来事(=偶然起きたこと)の二つを物語りながら統合していこうとしている過程にあるのだろうと。松木先生のおっしゃっていることの半分も自分は理解できていないかもしれないが、聴いていてそうだなと思った。今自分もがき苦しんでいる理由も分かったし、今のこの苦しい「ふり返り」という行為も自分をつくりあげていく大切な過程の中にあるのだろうとも思った。自分の体の中に一本幹がすうっと通った感じがした。正直ふり返ることは苦しいけれど、ここで辞めたらきっと以前のセマイ「日本語教師」である自分に戻ってしまう。もう少し頑張ってみようと思う。

(12月5日の記録より)

ここで私はふり返ることを苦しいとしながらも前のセマイ自分に戻ることに抵抗している。ここで私が苦しいと言っているのは、以前感じた言葉の壁とはまた異なる「記録に向き合うことの辛さ」を当時感じており、記録を書くことから逃げていたためである。それは自分と自分の実践に向き合うことの逃げでもあった。しかし、その辛さ以上に以前のセマイ自分には戻りたくないと思った。私はこの時のFDで背中を押されもう少し自分を「物語っていく」ことを決め、記録に向き合う気持ちを回復していった。

(3)自分の実践に多くの人・モノ・コトが関わっていることに気づく

上述した12月上旬のFDでの発表資料である「それまでの自分の記録のまとめ」の内容であるが、それは福井大学教職大学院での自分の実践を「人・モノ・コト」の観点から見直し、その特徴を捉えることを試みたものだった。当時人・モノ・コトという観点を持って記録を見直したのは私の本学教職大学院での実践が非常に多くの何かに支えられていることを直感として持

っていたからである。以下はそのFDでの発表のために準備した資料の抜粋である。抜粋が長く、また文脈が分からないと読みづらいため先に概略を述べる。一つ目の観点である「人」のところで書いているのは、先述した「教育実践研究A」(学部1~3年生が受講)および「教育実践演習」(学部4年生が受講)の授業(金曜日の2限に行なわれていることから通称金2と呼ばれている)で出会った美術専攻のHさんである。二つ目の観点である「モノ」のところで書いているのは、本学教職大学院スタッフである木村優さんの論文と自身が書いている記録である。三つ目の観点である「コト」のところで書いているのは、本学教職大学院のFDで渡辺本爾先生と玉木洋先生の話聴いたこと、全学のFD(福井大学全学部の教員で行なうFD)の中で行なわれた研究会で本学教職大学院スタッフであり特別支援教育が専門の笹原未来さんの話を聴いたこと、東京ラウンドテーブルで宇都宮大学、大阪教育大学、福井大学の話聴いたこと、である。

人：金2の授業で、美術が専門のHさんの報告を聞いた。うまくいかなかったと自分が思っている授業に真正面から向き合い、そこで生まれていた子どもの学び、そこから見えてきた自分の思い込みに真摯に向き合っている姿に「あー私何してんだろ」と思った。正直ふり返るのは苦しい。だけど学生さんもこんなに頑張っている。私も自分と向き合えないと、と思った。(11月29日記録)

モノ：木曜カンファレンスで山本くんは授業を見ても板書をとるぐらいしかできていないと悩んでいた。木村さんの論文を思い出し授業の見方がわからないのかなと思ったのだけど、もう少し話を聴いてみようと思った。(10月11日記録)

日々の教職大学院での実践の中で自分の見方を表明したりこうやって記録を書いたりする中で、なんだか自分の深淵を探っているような気持ちになっている。(11月1日記録)

コト：火曜日のFDの時間。渡辺先生が『教師教育改革に関する資料集』¹⁴⁾の中から1987年の教員養成審議会の「教員の資質能力の向上方策等について(答申)」を整理して発表して下さった。これまでの教員養成の歴史が渡辺先生のこれまでのご

経験と教員生活の中での出来事とともに語られ、自分ひとりでは到底たどり着けない読みを体験した。渡辺先生は「教員時代自分ではできあがった体系の中に押し込まれていた」とおっしゃっていた。そうした素直な気持ちを述べてくれる渡辺先生にもびっくりしたし、その気持ちはすごくよく分かった。教職大学院のFDはそうした自分たちを取り巻いている「体系」を同僚の先生方と経験や疑問を持ち寄りながら一緒に能動的に理解する時間となっているのだろうと思った。玉木先生の2000年の日本教育大学協会独立行政法人化問題検討特別委員会の「21世紀の教育系大学・学部のあり方」のご発表も、玉木先生が福井大学教職大学院の解釈を加えながら行なうもので興味深かった。教育の世界にいらっしゃる渡辺先生と企業経営の世界にいらっしゃる玉木先生が、地域格差の少ない教育の実現に向け意見を交わされた。多領域の人で現在ある問題を考えていくことのダイナミズムを見た思いだった。（11月17日記録）

11月15日に行なわれた「教育内容・教材開発研究会」で笹原さんの研究の話を聞いた。笹原さんの研究は人が人間性を回復していくとても本質的な実践だと思った。そして、笹原さんの実践のもう一つのすごさは、他業種との連携という点にある。教育の立場にある笹原さんは医療従事者を決して非難するのではなく、医療ができないところを教育がやっという視点に立っている。私だったらTさん（＝笹原さんが長年継続して関わっている障害を持つ男性）に対して一方的な医療を行なっている（と私が感じている）相手（＝医療従事者）を強く非難するだろう。医療と教育が共にあったことでTさんが幸せになれた。他業種と他業種が連携することでできることの大きさを笹原さんの研究から納得した。（11月17日記録）

実践研究東京ラウンドテーブルが11月30日、12月1日に開催された。2日目のラウンドテーブルのおもしろさはもちろんだったが、1日目のセッションIのゾーンA「学び続ける教師を支えるためにー「修士レベルの教員養成課程の改善に関するワーキンググループ」報告書と教職大学院改革」が印象に残った。教員養成課程のあり方が議論され

ていることは、これまでFDや福井大学の先生方の話の中からぼんやりと理解していた。今回は、教職大学院改革に着手した宇都宮大学と大阪教育大学の事例を聞くことで教職大学院改革が現在ドラスティックに起こっていることが実感を持って理解できたし、福井大学の特徴も二つの大学の事例があることでより具体的に分かってきた。（12月2日記録）

（12月5日のFD資料より）

私は本学教職大学院にて実に多くのスタッフおよび学生から影響を受けており記録にもたくさんの方が登場するが、このレジュメの「人」のところではHさんを取り上げたのは、Hさんに出会った11月下旬の時期、先にも述べたように、私は記録を書くことつまり自分の日々の実践に向き合うことから逃げていた。そんな時にHさんの話を聴き励まされた。「モノ」のところでは木村さんの論文を取り上げた理由については少し詳しく補足する。私は10月の週間カンファレンス（木曜カンファレンス）で、丸岡南中学校でインターンシップをしている当時M1であった山本泰平くんから「先生方の授業を見ても板書をとるぐらいしかできない」という悩みを聞いた。その時私は木村さんの『教師教育研究』6号にある授業参観の視点と授業分析のねらいについて書かれた論文⁵⁾を思い出していた。それは授業の見方が分からず悩んでいる読者に示唆を与える論文である。山本くんの悩みを聞きながら「山本くんは授業の見方が分からないと言っているのだろうか。でも違うかもしれない。もう少し話を聴いてみよう」という待つ姿勢、聴く姿勢をつくることができた。つまり、私は木村さんの論文のおかげである視点を担保に、山本くんの語りをこうだと決めつけず聴き続けることができたのである。「コト」のところでは取り上げた福井大学教職大学院のFDは11月の中旬に行なわれた『教師教育改革に関する資料集』を読む時間で起きた出来事である。私は渡辺先生、玉木先生、杉山さんと同じグループになった。渡辺先生は資料集に書かれてあるこれまでの教員養成の歴史を渡辺先生ご自身の教員経験と結び付けながらお話になられた。渡辺先生のおかげで、私は教師教育改革のこれまでの歴史を渡辺先生という「人」を通じ具体的に理解することができた。また、目の前で展開する渡辺先生と玉木先生のディスカッションに、異業種の人が協働で現在ある問題を考えることのダイナミズムと可能性を見た思いがした。

以上、12月上旬のFDの発表時の資料を見てみた。

この時、それまでの自分の記録を読み返し自分の実践を「人・モノ・コト」の観点から捉えられたことは非常に有意義であった。しかし、この時の自分の記録のふり返りの仕方はとても分析的であるように思う。つまり自分の実践の展開や道筋を辿るというものではない。「分析」してしまうのは自分のこれまでの研究や学習スタイルによるものなだと受け止めている。

(4)新たなアイデンティティを受け入れ始める

「学校教育以外の場に関わっていた私」は学校用語になかなか馴染めずにいた。前述の同僚である山口真希さんは『教師教育研究』6号の論文⁶⁾によると「木カン(木曜ファレンス)」等の言葉を自分の言葉にするのに時間がかかったそうだ。私にとっては「指導主事訪問」や「公開研究会」、「授業研究会」等の学校にまつわる用語が、文字としては迎えてもまるで外国語のように感じられ難しかった。しかし、次第に学校に関する言葉が抵抗なく読めるようになっていった。それに気づいた時のことを書いたのが以下の記録である。

私は学校用語になかなか馴染めない。例えば、公開研究会やら授業研究会やらが正確に覚えられない。自分の中で無意識にそうした言葉に壁を作っている(いた)のだと思う。その抵抗はこれまで学校教育ではない教育の可能性を追求してきた自分のアイデンティティによるものだと今は思う。そのアイデンティティの揺らぎを乗り越えようとしているからなのか、今日読んだ資料の中にたくさんある学校用語にずいぶん抵抗がなくなっていた。

(12月4日の記録より)

記録にも書いているが、学校用語に馴染めなかった、馴染もうとしなかったのは自分のアイデンティティを守る行為であったのだと思う。そして、この時期抵抗していた学校用語に馴染んできたのは、「学校教育に関わっている私」という新たなアイデンティティを自分の中で受け入れ始めたからだと思う。正直今でも学校用語は理解語彙ではあっても使用語彙にはなっていない。ただ、ゆっくり焦らず日々の実践の中でそれらを自分の言葉にしていけばいいのだと今は思っている。

4. 本学教職大学院での教育実践への積極的な向き合い(着任3か月目～4か月目)

着任3か月目から4か月目は、本学教職大学院での教育実践に対し積極的に向き合う気持ちが芽生えた時期であったと思う。それは、(1)「実践」の意味が拡大する、(2)他者の実践にもっと関わりたいと思うようになる、(3)学校の可能性に気づく、というプロセスを伴うものであったことに気づく。以下一つ一つを当時の記録を基にその時の出来事や気持ちを書いていく。

(1)「実践」の意味が拡大する

これまで私の中で「実践」とは「自分が授業や講義を行なうこと」であった。しかし、福井大学教職大学院では私が一人で院生の前に立って授業や講義をすることはない。院生の学び、ストレートマスターの院生について言えばインターンシップ、スクールリーダーの先生について言えば先生方それぞれが学校で取り組んでいる組織づくりやマネジメントを私達スタッフがチームを組み支えていく、それが教育実践(の一つ)である。私はそのことが自分の教育実践であることを頭で理解していても実感としてよく分からないでいた。

院生の学びを支えることが自分の教育実践であることを自覚できたのは12月のある日の週間カンファレンス(木曜カンファレンス)の時である。この日は至民中学校でインターンシップをしている河邊里紗子さんの話を聴く機会を得た。当時至民中学校にはM1とM2を合わせて5名の院生がインターンシップをしていた。私はこの日の週間カンファレンスの前に河邊さんと同じく至民中学校でインターンシップをしているM1の加藤儀直くんの社会科の授業を見学していた。加藤くんは私が見学に行った日1年1組と1年3組の2クラスでそれぞれアフリカの単元の授業実践を行なった。週間カンファレンスでは河邊さんから1年2組の子ども達の様子とそのクラスでこれから行なう予定である家庭科の授業計画を聞いた。河邊さんの話を聴き、私は加藤くんの授業をととても狭い視野で見ていることに気づいた。そのことを書いたのが以下の記録である。

河邊さんは加藤くんと同じく至民中学校でインターンシップをしているのだけれど、木カンでこの間授業見学はしなかった1-2のクラスの子どもの様子を教えてくれた。その話を聴きながら、私は1-1と1-3だけを見ていたことに気づいた。つまり至民中の生徒たちみんなはどんな感じか、これまで社会科に限らずどんな学習を行ってきたのかを知りもしないで、もっと言えば知ろうとしないで加藤

くんの授業見学をしていたことに気づいた。知ろうと思えば木カンでいくらでも知る機会があった。というか、木カンで至民中にインターンに行っている院生さんから「聞いていた」のに、その聞いたことと加藤くんの実践とを結び付けることができなかった。木カンも授業見学も自分の大事な教育実践であるのに、それらの実践を自分が疎かにしていたのだと思った。それは「教育実践」を、「自分自身が授業をやるもの」と非常に限定して捉えていたことが背景にあると思う。だから、木カンで院生さんの実践を聴くことも授業見学も自分の教育実践として積極的に位置づけられず、それらに向かう姿勢も、言い訳をすればそのときの自分の一生懸命ではあったのだけどなんだか、それはとても「ぬるい」ものであったと思う。

（12月13日の記録より）

私は毎週週間カンファレンスで院生のインターンシップでの様子や彼ら関わっている子ども達の状況を聞いていた。至民中学校でインターンシップをしている院生は5名と多く、おそらく毎週とっていいほど至民中学校のことを聞いていたはずである。そうであるにも関わらず私は加藤くんの授業を1年1組と1年3組のその日の社会科の授業、その日の子ども達の様子しか見ていなかった。至民中学校の1年生の子ども達はどんな子ども達なのか、子ども達は社会科に限らず学校でどんな学習を行なっているのかを週間カンファレンスで聞いているはずなのにそれを意識にのぼらせて加藤くんの授業を見る姿勢は私にはなかった。普段みんなから聞いていることを手掛かりに加藤くんの授業を見ていたら加藤くんの実践をもっと深く理解し一緒に考えることができたのにと悔やんだ。そして同時に院生の学びを共に考え支えることが自分の実践であることへの自覚と責任感が湧いてきた。以来、授業見学はもちろん週間カンファレンス、月間カンファレンス、ラウンドテーブルにおいて院生の実践を傾聴することを「自分の大切な教育実践」と位置づけ自分なりの精一杯で丁寧に取り組むよう心がけている。「実践」の意味が、自分が授業をするだけのものではなかったものから、他者の実践を支えることを含んだものに変った出来事であったと思う。

(2)他者の実践にもっと関わりたいと思うようになる

自分の中で「実践」の意味が拡大してからは、週間カ

ンファレンス（木曜カンファレンス）の時間がとても楽しみになった。そして、ただ院生のお話を聴くだけではなくより積極的な関わりをしたいと思うようになっていった。その時の気持ちを書いたのが以下の記録である。これは冬の集中講座が終わってすぐの週間カンファレンスで、M2の小川駿也くん、堀江沙也香さん、M1の山本泰平くん、坂下元くんと同じグループになった時のことを書いたものである。

ふと自分はみんなから学ぶばかりで何も返せていないことに気づいた。院生のみんなの学びを消費しているだけではないか、と。山本くんのメディアセンターの取り組みを実際見ていたら、坂下くんの英語の授業を実際に見ていたら、もっと二人の悩みを共有できるし二人の実践の展開を共に探索できるのに。院生のみんなの実践にもっともっと関わりたいと思った。

（1月10日の記録より）

この記録の中に出てくる山本くんはインターンシップ先でメディアセンターの活用の仕方を、坂下くんは英語の授業実践をそれぞれ頑張っている。これまで週間カンファレンスで二人の取り組みを聴く機会があったが実際に見に行けたことはなかった。この時話を聴きながら、もし私が二人の実践を見ていたらもっと文脈を共有した上で話ができたと残念に思った。そして残念に思うだけではなくこれからはみんなの実践にもっと関わっていこうと決めた。

院生は私にとってとても身近な他者である。この頃の私は、そうした身近な他者に留まらず少し遠い他者の実践にも興味を持つようになっていた。それを実感したのは12月の教員免許状更新講習の時である。私は2013年12月25日～27日の3日間、同講習にスタッフとして参加した。同講習では先生方一人一人がこれまでの自分の実践を振り返りこれからの実践の展望を拓くことを行なっている。具体的な内容としては、グループで長い自己紹介を行なったり、他者の記録を読んでまとめたものをクロスセッションなどを通じ報告し合ったり、自分のこれまでの実践を書いてまとめたりしている。私はあるグループのファシリテーターとなった。そのグループには他県の小学校に勤めていらっしゃるT先生がおられた。T先生は30代後半の女性の先生で、30代と若手ながらも教員としての自信と風格が感じられる先生であった。そのT先生が初日の自己紹介の時、採用2年目でクラス担任として関わったある子どものことが今でも夢に出てくるぐらい忘れられ

ないとおっしゃっていた。私はその T 先生の実践をもっと一緒に考えたいと思い、他者の実践記録を読む時間では多様なニーズを持つ子どもとの実践を書いた記録を手にとった。

私が選んだのは「ぼく、また誤解しちゃったのかな」⁷⁾というタイトルの記録。この記録を読みたいと思った理由は、同じグループだった T 先生の経験を聴いたことによる。T 先生は●●県の小学校の先生で、採用 2 年目で出会った小 5 の女子児童とのことが今でも夢に出てくるのだそうだ。その女の子は 2 か月に一度しかお風呂に入らず、学力が相対的に弱く、しゃべり方が幼稚で、クラスの人みんなに受け入れられず、結局 T 先生は何の対応もできず終わってしまったのだそうだ。それを今でも後悔しているという。辛かっただろうなと思う。 <中略> T 先生の問題をもっと一緒に考えたい と思って上記の実践記録を手にとった。

(12月26日の記録より)

この時初対面で三日間しか一緒にいる期間がない誰かの実践を共に考えたいと思った自分に驚いた。以来 T 先生と会う機会はないが、自分の日々の実践の中で採用 2 年目の先生に出会うと T 先生のことを思い出し、T 先生の話を支えにしながら先生方の話を聴いている。

(3)学校の可能性に気づく

年が明け 2014 年 1 月に自身の担当校の一つである至民中学校の全体研究集会に参加する機会があった。至民中学校では全体研究集会を毎月定期的に行っており、そこでは先生方の協働的な学び合いが実現されている。この時は翌週に控えた指導主事訪問のことが主な話題で、指導主事訪問時に公開授業をする先生方の授業計画をグループに分かれて話し合ったり、授業を見学する際にとる記録のことが検討されたりした。この時、記録をとることについて一緒に参加していた木村優さんが次のようなことを先生方に伝えていた。

至民中学校の全体研究集会でのグループディスカッションのあとの木村さんの話も印象的だった。30 人の先生方がいたとしてその 30 人の先生方みんなが、例えばクラスにいる一人一人の 30 人の記録を書いたときそれは「集合的な知性となる」という話。なるほどと思った。その「集合的な知性は子ども達一人一人の学びを支え、授業者の先生を支える」
(by 木村さん)。

(1月8日の記録より)

木村さんの、学校の先生方の集合的な知性は子ども達一人一人の学びを支え授業者の先生を支えるという言葉は、至民中学校の先生方の協働的な学び合いの姿と融合され私の中で深く納得できた。以来私は学校の先生方の学び合いが秘める可能性、ひいては学校が持つ可能性に積極的な関心を持つようになった。

もう一つ学校、より具体的には学校での学習の可能性を見出すこととなったエピソードがある。本学教職大学院の拠点校の一つに東京都板橋区にある赤塚第二中学校がある。私は同区にある I 中学校の日本語学級の放課後支援に長年携わっているのであるが、そこはセンター校であるため赤塚第二中学校を含む近隣の中学校から多くの外国人児童生徒が通級している。私は 1 月に行なわれた赤塚第二中学校の研究集会で、I 中学校の日本語学級に通級している外国にルーツを持つ N さんを見つけ彼女が在籍しているクラスの女子体育の授業を見学した。以下はその時のことを書いた記録である。この時の記録では N さんが体育の授業を通じどんな言語活動をしていたかを思い出せる限り丁寧に追って言葉にした。以下、少し長い抜粋となるが該当部分をほぼそのまま載せる。

N さんは体育の授業が始まったときずっと S 先生を見ていた。このとき S 先生は今日の授業の目標を話していた。先生と子どもが学習課題を共有する時間なのだったと思った。そのあと体操の時間。その時間は「1, 2, 3, 4」と言葉を使って仲間と一緒に体を整える時間なのだったと思った。そしてグラウンドを走る時間。N さんは黙々と一生懸命走っていた。私がそうであるように、走りながら N さんはきっと自分の今日の体調を知ったり、それに合わせて自分のペースを調整したり、今日の目標を立てていたりしていたと思う。それは自分の体と向き合う時間。いよいよサッカーの時間。N さんはコーンを運び位置を定める。それは距離や感覚を測る時間。そしてチーム分け。誰かの「昨日のチームと同じ」という提案に N さんが「えー、かわろうよ」と提案する。その提案ははじめみんなの耳に届かなかったのだけど N さんは諦めずもう一度「かわろうよ」と提案。N さんの提案が受け入れられチームは昨日とは違う編成になる。3 人が一チームで、一人がボールを蹴ってコーンをまわり戻ってきて次の仲間に渡す。それはボール(道具)と自分との間で関係を作る時間。「アウトサイド」という

言葉も飛び出す。今度は3人でボールを蹴る。3人で黙々とやっているとS先生から「人数が増えると言葉かけなきゃな」とアドバイスがある。そのアドバイスを受けて3人の子ども達の間で声かけが始まる。それを見てS先生から「そういう声だ。そういう声」と子ども達の協働を支え励ます言葉かけがなされる。次に一度全体で集まる。今度は3人のチームが3つ集まって一つとなり総勢9人となる。9人が敵と味方に分かれて（5人vs4人）ゲームをするのだが、そこで子ども達の間で真剣な話し合いが行われる。どのようなやりとりかは遠くて聞こえなかったのだけど、Nさんのいるチームが話し合いに一番時間がかかっていた。言葉をたくさん使って複雑なやりとりをしている時間だと思った。話し合いが停滞しみんなが沈黙したとき、Nさんが「で、それで？」と話し合いを促す。敵と味方に分かれゲームがスタートした。Nさんが「よーい、どん！K、はい！」とペースを作る。Nさんはこのときボールを蹴る方向を定め、ボールのスピードを調節し、さらにそこに声かけをするということを同時にやっていた。当たり前ができることのようにだけど、これって結構難しいことだよなあとと思った。仲間がゴールを決めたら一緒に喜び拍手で賞賛を送る。スポーツがこんなに感情に溢れたものであること、こんなに人との関わりの中で言葉を使うものであることに改めて驚いた。ある時9人が団子になってボールを蹴りあっている。そのときにS先生の「コートは広いぞー」との声かけ。空間を使うことが今日の課題だ。Nさんたちが空間を広く使いはじめ仲間同士で声が届きにくくなったそのときNさんが手を振って自分の位置を仲間に知らせ始めた。言葉を媒介にしたコミュニケーションから身体を媒介にしたコミュニケーションへ。そして最後に起きたこと。小柄だが高いサッカー技術を持つ一人の女子生徒とNさんとがボールを取り合う場面で、その子に比べて体の大きいNさんが自分の体の動きを調節しながらその子とボールを取り合っていた。そこで授業終了。Nさんが率先してみんなのゼッケンを集める。最後に学習カード。今日は書く時間がなく宿題になったけど、S先生が、誰かのものを写さないこと、事実だけを書かないこと、頑張りたいなどの決まり文句で終わらせないことをアドバイスしていた。学

習カードは子ども達のふり返りの道具。この体育の時間をNさんはどのように捉えただろう。授業を見て、今まで自分は日本語学級でのNさんしか知らなかったんだと改めて思った。そして、言葉の学習の時間（＝国語や日本語学級での学習）以外でも、学校では豊かな言葉の学習が行われているんだと思った。＜中略＞外国人の子どもの学びを日本語学級だけではなく、学校全体で捉えていこうとしている自分に気づいた。教職大学院に来てからももうすぐ4か月。この4か月で自分はずいぶん違う地点に来たと感じた。

（1月20日の記録より）

日本語学級に通級する子ども達は、通常在籍するクラスで国語や社会の授業が行われている時にやってくる。「取り出し授業」と言われる一つの形である。私はI中学校の日本語学級の放課後支援に、NPOのスタッフとして関わっている。そのNPOは仲間と一緒に運営しているもので、外国人児童生徒の母語と日本語とと教科学習を支えることを目指している。赤塚第二中学校のNさんも週一回I中学校の日本語学級に通級し日本語を学び、私達NPOが関わる放課後支援にも参加している。私はこれまでこうした取り出し授業、つまり個別支援について、その中身については考えてきたものの「個別支援」そのものについては何も疑問を持っていなかった。しかしNさんの体育の授業を見て、Nさんが友達との関わりの中で多くのことを学んでいること、そして言葉の授業（＝国語や日本語学級での学習）以外にも学校には言葉の学習機会が溢れていることに気づいた。そして個別支援だけで外国の子ども達の状況を打開していくことの限界、言い換えれば学校・学級での学習の可能性に目を向けるようになっていった。

5. 組織の一員であることへの意識と行動の萌芽（着任5か月目～6か月目）

着任5か月目から6か月目になると、組織の一員であることへの意識と行動の萌芽が芽生え始めたと感じる。それは、(1) 他領域の人とのコミュニケーションに挑戦する、(2) 他大学の人とのコミュニケーションに挑戦する、(3) 自分の中にこれから考え取り組んでいきたい「問い」が生まれる、という三つの自分の行動や気持ちにより確かめられる。以下、それぞれを当時の記録を基に書いていく。

(1)他領域の人とのコミュニケーションに挑戦する

2014年2月、福井県特別支援教育センター主催の実践研究発表会に参加した。他領域ではあるがこの研究会に参加してみようと思ったのは、これまで、前述したように同僚の笹原未来さんの研究を聞き、また研究室が同室だった山口真希さんから特別支援教育の話を知りながら、二人が関わっている実践の現場をもっと知りたい気持ちが湧いてきたからである。実践研究発表会に参加した時の感想はニュースレターで報告した。ここではそのニュースレターの原稿を以下抜粋する。

粉雪が舞う2月14日(金)福井県自治研修所にて行われた福井県特別支援教育センター主催の実践研究発表会に参加しました。あいにく後半のみの参加となりましたが、特別支援教育に関する会への参加は初めてだったこともあり、いくつかの新鮮な驚きがありました。ここでは紙幅も限られているためその中から二つをご紹介します。

一つ目の驚きは、発表者を含め会の参加者の方々の所属が、幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援教育センター、大学と多機関で、さらには先生方のご専門も実に様々であるということでした。私は日本語教育が専門で、言語少数派つまり日本社会で日本語を母語としない成人と子どもの言葉の教育のあり方を追求しています。日本でいわゆる「マイノリティー」とされる方々への学習を考えている点において特別支援教育と日本語教育は共通点を持つと思っていますが、その日本語教育では、専門領域別に研究会を持つことが非常に多いです。例えば、留学生の日本語教育に関わっている人達のアカデミック日本語教育の会、ビジネスパーソンの日本語教育に関わっている人達のビジネス日本語教育の会、地域の外国人住民の日本語教育に関わっている人達の地域日本語教育の会といった具合です。今回福井県特別支援教育センターの実践研究発表会に参加して、そうした日本語教育における領域分断型の研究会は、自分を含めた日本語教師達が日本に住む外国人の生活や人生を断片的に捉えていることが根っこにあるのだろうと思いました。

二つ目の驚きは、先生方の実践研究発表に実に多くの人・モノ・コトが出てくることでした。私が拝聴した鯖江市北中山幼稚園の大滝和枝先生、福

井県立嶺南東特別支援学校の河端稔先生、福井県特別支援教育センターの野村陽子先生の三つのご発表だけでも、その中に、例えば人としては「幼児、子ども、職員、担任、教員、支援員、保護者、講師、センター所員」といった方達が、モノとしては「個人記録、絵本、ユニバーサルデザイン、ワークシート」といったものが、コトとしては「基地ごっこ、組体操、給食、運動会、幼稚園と小学校との連携、縦割り保育、職員の合同研修会、校内研究」といった出来事がここに書き出せないほどたくさん出てきました。特別支援教育の先生方にとってそれらはあまりに当たり前で、それがどうしたと思われるかもしれませんが、そのことは教育の場が豊かな人間の営みの場であるからこそそのことで、日本語教育の実践研究発表にはたしてどれほどの人・モノ・コトが出てくるだろうかと疑問を持ちました。

人の生涯に渡る成長を考えていくこと、教育の場を人間活動そのものの場としていくこと。教育の本質に関わる大事なことを教わりました。日本語教育では日本語教育のあり方を考える議論の場に、当事者つまり日本語を学ぶ外国人の参加をどう実現させていくかが課題になっています。特別支援教育ではその辺りがどのようになっているのか等聞いてみたいことがたくさんあります。今後も領域を超えた先生方との交流や議論を続けていきたいと思っています。

(福井大学教職大学院ニュースレター60号より)

私はこの原稿を書くことで自分が関わってきた日本語教育という領域と特別支援教育という自分にとっては新たな領域との間に接点を見つかることができた。当日、実践研究発表会に参加していた笹原さんが会の中で、教育の中にある様々な分断を乗り越えていくこと、それが子どもの育ちや学びのあり方の良さにつながるということを言っておられなるほどと思った。この原稿はその笹原さんの言葉を支えにしながら書いたものである。今思うと、この頃私は授業見学を重ねる中で学校には私がこれまで関わってきた外国人児童生徒に限らず多様な背景および特徴を持った子ども達がいること、そしてその子ども達一人一人の多様性(diverse)を活かした包含的な教育のあり方に関心を持ち始めていたのだと思う。そのためには教師と教師、教科と教科、領域と領域が分断を乗り越えつなげていかなければならない。分断を乗り越えていくために

他領域の人とのコミュニケーションをとっていこうという意識が芽生えたターニングポイントとなる出来事だった。

(2)他大学の人とのコミュニケーションに挑戦する

2014年2月に宇都宮大学で行なわれたラウンドテーブルに本学教職大学院スタッフとして参加した。他校のラウンドテーブルに参加するのは12月の東京ラウンドテーブルに続き2回目であったが、東京ラウンドテーブルとは明らかに違う姿勢を自分が持って臨んでいることに私は参加した時から気づいていた。その変化の様子を記録で以下のように書いている。

2月8日に宇都宮大学のラウンドテーブルに参加した。以前東京ラウンドテーブルで宇都宮大学の教職大学院の設置構想を聞いていたこともありどのようにそれからその構想が発展したのかにも興味があった。＜中略＞これまでの「ラウンドテーブル」に参加するという個人的な自分の学びを追求する意識から、福井大学教職大学院に所属する私がこのラウンドテーブルにどう貢献できるかという意識へと参加意識が変化していることに気づいた。＜中略＞まず、学生・院生交流があった。ここでは福井大学教職大学院から参加している全員（スタッフ、ストレート院生、リーダーの院生）と宇都宮大学の先生および院生さんが主な参加者だった。今から思うとこの場合は教職大学院のカリキュラムの構想がほぼ整った宇都宮大学の先生方が今後このカリキュラムを実現化するにあたりどのような課題につきあたるのかを福井大の院生からの忌憚のない意見で検討したいという場だったのかもしれない。宇都宮大学はリフレクションを単位化している点、つまり省察を中心においている点で福井大学と共通点を持つ。ただしインターシップの期間という点では特徴を異にする。＜中略＞新しく教職大学院を構想し実現化している大学にこうやって福井大学の私たちが行って一緒に考えることの意義を感じたラウンドテーブルだった。

（2月10日の記録より）

記録にも書いてあるが12月の東京ラウンドテーブルでは福井大学教職大学院のスタッフとして参加していながらただただ自分の学びに集中していた。それは当時教職大学院に慣れることに必死であったことと帰属意識がまだ十分に持てていなかったことが理由であ

ろうと思う。慣れることに必死である状況は今も変わらない。着任して以来教師教育改革のドラスティックな動きに戸惑うことの連続である。しかし、2月の宇都宮大学のラウンドテーブルでは、大学間の横のつながりを意識し福井大学教職大学院にいる私に何ができるのかを考え、他大学とのコミュニケーションを積極的に図ろうとしているのが確認できる。

(3)自分の中にこれから考え取り組んでいきたい「問い」が生まれる

本学教職大学院に着任して6か月が過ぎようとする3月中旬、私は上海にある上海師範大学に訪問調査に行く機会をいただいた。上海はPISA上位の地域であることから世界的に注目を浴びている。上海では上海師範大学を始め、附属小学校や高校への訪問、教育委員会の方達との交流など充実した時間を過ごした。その中で特に印象に残ったのがある高校の先生が言っておられた「世界で通用する人材」という言葉であり、その下で展開されている英語教育の内容であった。以下はその時のことを中心に書いたニュースレターの原稿の抜粋である。

去る3月16日～19日上海師範大学訪問調査のため総勢11名の教職大学院のスタッフで上海を訪れてきました。霞んだ空に向かってぐんぐん伸びるように林立する高層ビル群、滑走路にもなりそうなほどの広い道路を激しく往来する車やバイク、けたたましく鳴るクラクション、そして人・人・人。そしてなんといっても街中に立ち籠める独特の熱気と活気。一体そうした「熱」はどこから来るのだろうかという私の疑問は、視察を通じて出会った先生方の話を聞いて払拭されていきました。先生方の話の中に幾度となく出てくる”future” “development” ”power” ”energy” という言葉。「世界で通用する人材を育成する」（楊浦高級中學・向校長）ため、2400万都市上海は話に聞いていた以上に教育熱が高まっていると感じました。ここでは、その上海の教育の一端をお伝えすべく、視察中印象に残った上述の楊浦高級中學における英語の授業を取り上げたいと思います。

楊浦高級中學は楊浦区にある附属高等学校です。＜中略＞私達はあるクラスの英語の授業を見学する機会に恵まれました。先生が教室に入りチャイムが鳴ると同時に授業開始。20代後半から30

代前半と思われるその若い女性の先生は英語が非常に堪能です。授業はすべて英語で進んでいきます。さっきまで中国語（上海語）でおしゃべりしていた学生の間にもピリッと緊張が走ります。その日はノーベル賞について書かれた読み物が教材でした。先生はテンポの良い授業、生徒が退屈しない授業を心がけているのでしょうか。電子黒板ではアニメーションを駆使し、読む時間や考える時間も「3分」（実際は1～2分ほど）と区切りながら、「quick, quick」というかけ声とともにテンポよく授業を進めていきます。もちろん、スピードについていけず考え込む生徒や先生が思っていたのとは違う答えを述べる生徒もいます。そうした生徒達に先生は「また後でね」「それも一つの答えね」と彼らの心理的負担を軽減すべく声をかけます。あつという間の50分。見学者である私もいつしかそのリズムカルな授業に引き込まれ「ああ、よく集中して勉強した」と心地よい頭の疲れを感じました。でも教室を出た後、ふとこの授業はどこか予定調和的、もう少し言えば先生がデザイン（モデル化）した学習過程（認知過程）を生徒がなぞる、そうした印象を持つ授業だなと思いました。

「世界で通用する人材」とは一体どういうことを言うのか、そして、そこに第二言語教育はどのように関わっているのか。対象言語は違えど同じ第二言語教育に携わっている私の中に、これから考えていきたいと思える大切な問いが生まれた貴重な授業見学でした。

（福井大学教職大学院ニュースレター63号より）

ニュースレターに取り上げた高校に限らず上海では「世界で通用する人材」の育成が意識され教育が行われている印象を持った。そしてそれは日本も同じであると思う。日本では「グローバル人材」という言葉をよく耳にする。世界で通用する人材（グローバル人材）というのは一体どのような人のことを言うのか、またそこに第二言語教育はどのように寄与あるいは加担しているのだろうか。教育熱の高まりを肌で感じる上海の地でそんな問いが生まれた。私が本学教職大学院の中で今後考え取り組んでいきたい大切な問いである。

6. 今後の展望

この半年間の学びをふり返って気づくのは、私の実践は数多もの他者との関わりの中で営まれているとい

うことである。福井大学教職大学院に着任した当初私は「複雑な網の目」の中にいると感じた。本報告を書くことを通じその「網の目」は「人（他者）」であったことに気づく。ここで言う「人（他者）」とは、生身の人間に限らず、書かれたもの（実践記録や長期実践報告等）、世代、組織といった、人々によって営まれているもの、つくりだされているもの、受け継がれているものも含む。私の実践はその「人（他者）」との深い密度を持ったコミュニケーションによって編まれている。

私は本報告の題目を「福井大学教職大学院における新入教員の学びのプロセス」とした。冒頭にも書いたように、本報告は本学教職大学院に着任してからこれまでの半年間に形作られてきたと感じている自身の「学び」に言葉で形を与えたいという思いが出发点であった。その学びの内容とプロセスについてはこの報告を書くことを通じある程度掴めたと思っている。ではこの私の学びは一体何のための学びなのだろうか。

世界は今グローバル化の中にあり、未だかつてないほど動揺している。その中で私達は貧困や環境問題などこれまでにない多くの複雑な課題に直面している。私達はその問題を日々のニュースや新聞で知ることができるが、多くの場合それらは情報の洪水の中に埋もれ忘れ去られたり、あるいはあまりの複雑さのために解決が諦められたりしている。それは私達の生活に深く根ざすものであるのに、である。問題が忘れ去られたり解決が諦められたりしてしまうのは、私達が自分の状況を自分の言葉で掴むこと、その上で解決の展望を持つという営み（学習）を普段あまり経験していないからではないかと思っている。自らの言葉で自らの状況を掴み解決に向けた気持ちや意思を持ち行動していくこと。それは社会（世界）に対し自分が能動的であること、当事者であることを保障する大切な行為であると考えている。私が本報告で行なった「自分の状況を自分の言葉で掴み展望を持つという行為」はこの社会（世界）の当事者として自分がより良く生きていくことを支える力になるものだろう。

最後に、本報告を書くことを通じ見えてきた福井大学教職大学院での今後の自分の取り組みの展望を述べたい。まず、院生の学びを中心に置いた教育実践を行ないたい。本報告を書いて気づいたことは、私の実践は学びの主体が自分（のみ）であることである。その証拠に、記録には自分のことばかりが書かれていて院生の様子や学びはほとんど書かれていない。教職大学院における学びの主体者は院生である。その院生を中心

に置いた教育実践を行なうこと、そしてその院生の学びと自分の学びがどのように関わり合っているのかを探索したい。次に、本学教職大学院の学びのサイクルにおける院生と自分の学びを捉えていきたい。私のこの半年間の記録を読み返すと、週間カンファレンスや月間カンファレンス、集中講座やラウンドテーブルといった本学教職大学院の学習サイクルがそれほど意識されていないと感じる。記述としてはあるのだがその目的や、それらがサイクルや展開を持ったものであることへの意識は薄い。それは私が年度の途中に着任したことも影響しているのかもしれない。

新年度になり新しく入学してきた院生や新しいスタッフとの新たな実践がすでにもう始まっている。今回のこの報告が新たな実践の中でどのように意味づけ直されるのか、そしてどのような地平が開けそこにはどんな景色が待っているのか、それを楽しみに日々記録を書きふり返ることを今後も継続していこうと思う。

註

- 1) エティエンヌ・ウエンガー, リチャード・マクダーモット, ウィリアム・M・スナイダー [桜井祐子訳] (2002) 『コミュニティ・オブ・プラクティス』 翔泳社
- 2) 山口真希 (2013) 「福井大学教職大学院における若手研究者教員の力量形成過程—コミュニティ内『言語』の実践的理解を軸に—」 『教師教育研究』 vol.6, pp.199-206.
- 3) 松木健一 (2013) 「学校拠点方式の教職大学院とは何か—学校ベースの実践コミュニティの創造を目指す福井大学の取組を振り返る—」 『教師教育研究』 vol.6, pp.3-18.
- 4) 福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コース (2006) 『教師教育改革に関する資料集1』
- 5) 木村優 (2013) 「授業参観の『視点』と授業分析の『ねらい』—一つの『型』を超えて—」 vol.6, pp.239-246.
- 6) 山口, 前掲
- 7) 堤由香里 (2007) 「ぼく、また誤解しちゃったのかな—なかまの中で自分を見つめる目を育む—」 青木道忠・越野和之・大阪教育文化センター編 『発達障害と向きあう—子どもたちのねがいに寄り添う教育実践—』 クリエイツかもがわ